

《第Ⅲ部》 酒詰仲男先生門下生の回顧集

1950年代中葉、恩師・先輩・発掘調査とその時代

1953年度生 鈴木重治

はじめに

昭和28（1953）年の春、恩師・酒詰仲男先生（以下、先生）が母校の同志社大学（以下、大学）に赴任された。私が文学部文化学科に入学した年である。すでに67年が過ぎ去った。日本文化史の考古学を専攻し、今なお日本文化の一端を楽しく学び続けながら、生かされていることに感謝している。久しぶりに「実習室だより」創刊号（1957年3月刊）を刷り挙げた当時を思い出した。

この時代、一口で言えば文化国家の建設を願った学問復興の時代であり、いわば日本国の再生に向けて、若者らが真剣に学びつつ将来に希望を託し、逞しく、楽しく行動した時代であった。つまり月の輪古墳の調査と、いたすけ古墳の保存運動に象徴される時代である。

ここでは学生時代に参加した発掘調査を中心に、大学の考古学実習室の黎明期を振り返るが、文化財保護法・博物館法の制定と遺跡の保存運動など当時の社会的背景の中、考古学史上に多くの業績を残された先生の人と学問などについては、すでに多くの機会に述べたことでもあり、最小限に留めて参考文献に譲り、我が人生の血となり肉となった当時の先輩や同僚と同志社で過ごした時代を振り返ることとする。

先史学研究室と、1954年度～1956年度に参加した発掘調査

入学当時の大学には、考古学研究会はもとより先史学研究会もなかった。そこで、私はまず学友会傘下の学術団体・歴史学研究会に入り、秋山國三・井ヶ田良治先生から歴史学の基礎を学び、池本幸三・仲村研・宮沢正典らの先輩と行動を共にした。同時に、高校時代に東京大学の人類学教室におられた先生の講演を聞いたこともあって、実証を尊重する考古学への関心が高まり、発掘調査の魅力に惹き付けられ心を弾ませていた。

先生の最初の研究室は、烏丸上立売西入に在った同志社プールの脇、現在の寒梅館の地にあり「先史学研究室」の札が掛けられていた。先生ご自身が「先史学」を標榜しておられたことになる。そのことをよく示すのが、日本最初の『考古学辞典』（改造社刊・1951年）である。編者の先生は、序文の中で次のように述べられている。「…酒詰が人類先史学専攻である為、最初先史学辞典とする筈であったのであるが…（中略）…一般の人々にも親しまれ易かろうという書肆の要望で、この名を選ぶこととした（原文のママ）。」つまり、先生が人類先史学者と自認されておられたからこそその表札であった。当時、実習室はまだ無かった。

1954年の夏、先生が大学に赴任されて最初の発掘調査が鳥根遺跡で行われた。院生の森浩一・石部正志の両先輩が先遣隊として派遣され、私たち学生は調査補助員として参加し、出土直後の遺物を土と共に篩に通して水洗し、魚骨の選別などを楽しみフグやタイの骨の特徴を覚えた。縄文時代前期初頭の繊維土器を、西日本で初めて検出した遺跡であった。その直後、先生に誘われ千葉市の誉田高田貝塚の調査に参加することが出来た。

その発掘調査届の目的欄に、「古東京湾の海進海退の研究」と書かれていたこと、縄文時代後期の



図1 日本最初の「考古学辞典」と、千葉市菅田高田貝塚調査時のスナップ・報告書

貝層中から7～8個の人間の頭骨だけを集めた土壙を掘らせて頂き、休憩時に千葉大学の岡田茂弘さんと共に学習院の学生達と西瓜を頬張ったことを思い出す。人骨の扱いについては、東大人類学教室の鈴木尚・小片保の両先生に依頼するとのことであった。

その年の暮、京都市右京区の大宝寺山古墳群の一部を実習室が発掘調査することになり、安井良三さんを中心に歴史学研究会のメンバーが調査に参加した。古墳時代後期の横穴式石室を持つ6基からなる古墳群であった。

1955年春の調査で印象強く残っているのは、和歌山市岩出町の明楽山古墳群の調査である。國學院大学の金谷克己さんが発掘担当者であり、石部正志さんの勧めで国学院大学・和歌山大学の学生と調査に参加し、酪農家の牛乳風呂を連日楽しんだことを思い出す。横穴式石室の玄室中央部で、初めて金環を検出した時の感動は忘れられない。

1956年の夏、大学が主催した発掘調査は熊本県球磨郡相良村の吉ノ尾古墳群の調査である。人吉市出身の山田良三さんの世話で5～6世紀代の墳墓群を掘り、森さん・石部さんの指導を受けて「同志社歴研」10号に収録された調査概報を執筆した。刊行物を先生に届けたところ、大変喜ばれ勧められて夕飯をご馳走になった。この年の発掘調査は、この他京大・関大などが主催した発掘であり、多くの先生方や友人が出来、その後の交友も嬉しく意義深い機会であった。具体的に要点のみを記そう。先生の指示で京大の梅原末治先生が調査団長、調査主任が、樋口隆康先生の広沢の池の南、右京区の広沢古墳の調査に参加し佐原真さん、中尾芳治さんら多くの友人が出来た。また関大の末永雅雄先生が調査団長の左京区岡崎の鶴塚の調査では、網干善教さんとも親しくなった。その間、森さん中心の南河内のかまど塚、宇田川誠一さんのお宅で合宿した伽羅橋遺跡、末永先生中心の国府遺跡、宇佐晋

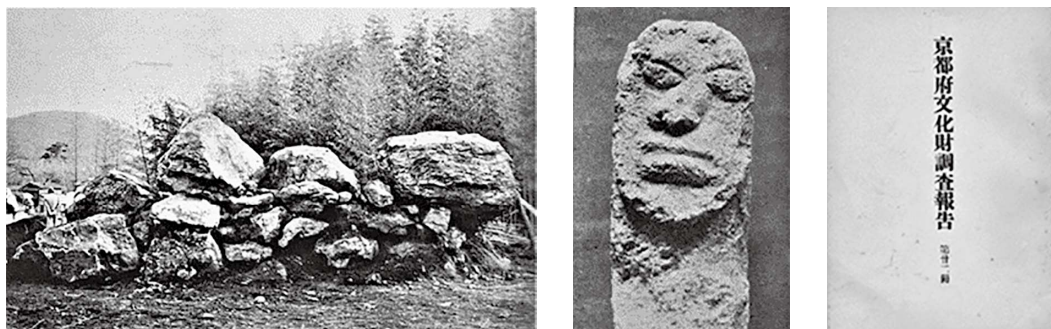


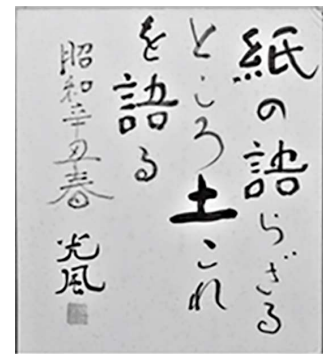
図2 京都市嵯峨野の広沢古墳・家型石棺材を加工した人面像・報告書（樋口隆康氏より頂く）



図3 先生宅のクリスマス



「同志社歴史研」第10号



先生から頂いた色紙

一さんにお世話になった本山遺跡の調査などで、各時代の土器・陶器などを観察することが出来た。

酒詰ゼミ・来校された考古学者・日本考古学協会・全国博物館大会・先輩に学ぶ

多くの先生方と云えば、先生のゼミの時間に藤田亮策・八幡一郎・和島誠一・石田茂作・篠遠喜彦の各先生が来校されて、それぞれ個性的なお話を聞くことができたのも大きな収穫であった。学問は一つの大学で学ぶのではなく、多くの研究者から学べという先生の教えであり、明德館で開かれた日本考古学協会の大会では、プロジェクター操作を担当させて頂き、研究の面白さを学ぶことが出来た。考古学だけではなく、先生の博物館学の授業も楽しかった。天理大学で開かれた全国博物館大会の参加も当時の博物館事情を考える上で有意義な体験であった。博物館実習では、人文系は京博で影山春樹・鈴木博司さんらによる「モノ」の扱いの具体例や保存法、自然系では京都市立動物園での動物飼育法やカバ・キリンへの給餌など、楽しい館園実習を体験した。京都国立博物館での実習は就職にも役立ち、その後に活かした。楽しいことは沢山あったが、先生のお宅でのクリスマスも忘れることが出来ない。先生のご家族、石部さん・千代肇さん・坂上君・先生の媒酌で私の生涯の伴侶となった妻も一緒であった。まさに同志社ファミリーとして家族ぐるみの暖かい団欒であった。

また、気さくな先輩と楽しい時間を過ごせたのも、考古学を専攻した賜物であった。南海フォークスの大ファンであった森さんとは、校庭でキャッチボールを楽しみ、石部さんとは雪の鶯塚で雪合戦を楽しんだ。勿論、森さんや石部さんが教えて呉れた本命は、考古学の基礎であり文化財保存の重要性であった。とりわけ森さんからは、いたすけ古墳の保存運動を通して市民と考古学者の連携の大切さを学び、酒の飲み方も習った。石部さんが土器の破片を見せて「必要な観察点を3つ以上、言ってみな」と問われたことも忘れられない。形態・製作技術・素材の属性・時代性・地域性など、観察力に必要な視点を学ぶことが出来た。

当時の実習室、仲間たちと過ごした時代

まだまだ、走馬灯のように当時のことが脳裏を走る。当時の実習室は今の良心館の一部で、元同志社中学校のグラウンドの北にあった。同期の仲間には愉快的な豪傑達がいる、応援団長の多武君を始め、野球部・アメフトなど体育会の猛者が何人もいた。実習室だよりも登場する梶石君などは、当時の関西6大学野球で活躍した一塁手の強打者であった。西京極球場へ応援に行き「カレッジソング」や「応援歌・同志社ヒーローズ」を歌ったものだ。歌と云えば、「同志社考古学おんど」をコンパで歌った



図4 当時の実習室と同期の仲間たち（卒業アルバムより）

ことなど、懐かしい限りである。

また、上賀茂のお土居が破壊されそうになった開発の現場を見て、保存を訴えるため京都新聞に投稿し、掲載されて保存の後押しが出来たことなど、良き思い出の一つである。

広島で開かれた第1回の原水爆禁止大会に参加して、戦争の苦しみを体感された先生から激励されたこと。50年代同志社平和の会の仲間たちと反戦・平和を語り合ったことも忘れられない。いわば自由を謳歌しながら、考え、考えて行動した同志社の青春時代であった。

むすびにかえて

「実習室だより」の時代は、まさに陶淵明の「…得歎當作楽…及時當勉勵…」であり、私にとっては「心の砦」を構築した時代であり、教訓に満ちた時代でもあった。

同志社考古学の黎明期に、日本文化の多様性と地域性を、各地の遺跡を通して学び、その調査・研究・保存・活用・整備など考古学一連の作業の一端に触れながら、常に社会と考古学の関係を考えて青春時代が、我が人生の土台となったことに感謝し、誇りに思う。

《参考文献》

- 鈴木重治 1965「追憶ひとこと」『古代文化XV 3（特輯）酒詰教授追悼号』所収 財団法人古代学協会
 鈴木重治 1975「酒詰先生の人と学問にふれて」『日本考古学選集第22巻酒詰仲男集』所収築地書館刊
 鈴木重治 1997「酒詰仲男の人と学問 【ワークショップ】貝塚研究の源流」『貝塚研究第2号』所収
 鈴木重治 2010「ミニ考古学者列伝2 酒詰仲男」『よくわかる考古学』所収 ミネルバ書房
 田中貞夫・太田雅夫編 2011「50年代の群像 同志社の青春」50年代の群像刊行会
 鈴木重治 2015「文化財保護法の制定と月の輪古墳」『文化財保存70年の歴史』所収 文化財保存全国協議会
 編 新泉社刊

同志社大学先史学会の『実習室だより』創設の頃

1957年大学院入学 岡田茂弘

酒詰仲男先生と先史学

酒詰仲男先生が同志社大学に着任されるまで勤められた東京大学理学部人類学教室（以下「人類学教室」とする。）では、形質人類学（Anthropology）・先史学（Prehistory）・民族学（Ethnology）を専門分野（頭文字を取って「Ape（人類猿）の会」と称した。）としていたが、考古学は帝室博物館（現東

京国立博物館)との資料収集・研究分野の棲み分けから、日本国家が成立する古墳時代以降を帝室博物館、それ以前の石器時代(縄文・弥生時代)を人類学教室が担当することに明治時代からなされていた。

縄文時代の貝塚研究を主題とされた酒詰先生は、当然ながら石器時代の研究者であり、先史学の研究者であった。このため、同志社大学に赴任されると自己の研究室を「先史学研究室」と称し、同志社大学今出川校地の北辺の同工館1階に置かれていた考古学実習室を「先史学実習室」と呼ばれた。

酒詰先生の「先史学」と「考古学」との関係が明確にされたものはないが、酒詰先生は考古学の中に先史学が含まれると考えておられた。酒詰先生御在籍中から、先史学研究室が名神高速自動車道路等の考古学的調査を積極的に推進しておられ、私が同志社大学大学院合格直後に大阪四天王寺境内の発掘調査に参加を認めてくださったのは、考古学の中に先史学があるとお考えの故であろう。

同工館1階の考古学実習室が誕生した1957(昭和32)年3月に、先史学会の総会が考古学実習室で開催され、当時在籍していた酒詰先生、石部正志氏以下の大学院生、鈴木重治氏以下の考古学を専攻する学生が出席した。

私は、第1回総会当時には、未だ同志社大学大学院に入学していないので出席できず、記録は同年4月から宮崎県立博物館へ赴任が定まっていた鈴木重治氏が行い、原稿を託されて、4月にガリ版の原稿を切って『実習室だより』第1号として印刷・刊行した。

同志社大学大学院への入学

酒詰先生の言で、酒詰先生が同志社大学への赴任が決まった折に、日本考古学協会委員長藤田亮策(東京芸術大学教授)氏から、「同志社大学では日本海岸の縄文時代遺跡の調査研究を推進してほしい」と要望され、1954(昭和29)年7月に鳥根県大社町の菱根遺跡を同志社大学で発掘調査した。「今後も京都府の日本海岸で縄文時代の遺跡を発掘調査しようと考えている」との事であった。

1956(昭和31)年3月に千葉大学文理学部地学科を卒業して、1年間同学科の연구원として地学実習の助手を務めながら、前年に大学に提出した卒業論文の「関東ローム層」の研究に手を入れ、1年間かけて指導教官の近藤精造助教授と連名で大学の紀要に掲載してもらったが、これが私の唯一の地質学の論文である。そのまま千葉大学に残っても先が見えなかった。私は1957(昭和32)年度からの身の振り方について酒詰先生に御相談すると「同志社大学大学院で一緒に日本海岸の縄文時代遺跡の調査研究を開発しよう」とすすめられた。関東地方の縄文文化については細かい研究がすでになされているので、新たな発見はすくないと思われるが、日本海岸の西部での縄文時代の研究は未だ乏しいから研究の余地があると考えて、同志社大学大学院修士課程への入学を決心した。3月初めに大学院修士課程を受験して合格したが、同院の博士課程を森浩一氏が受験していた。

京都での生活と四天王寺境内の発掘調査

私は同志社大学大学院に合格して京都へ転居するため、東京での知人・友人に挨拶廻りをすると、東京大学工学部建築学科の建築史研究室で「4月に関西に行くのなら、その時期に大阪市の四天王寺境内の国営発掘調査があるから参加せよ」とすすめられた。言を左右にして別れると、翌日、国営発掘調査の責任者である斎藤忠文化財保護委員会事務局記念物課主任文化財調査官から電話で発掘への

参加を求められ、酒詰先生にご相談すると、「4月1日から大学院の授業が始まるわけではないから、四天王寺へ行っても良い」と許可を得た。

1957（昭和32）年4月から私は同志社大学大学院修士課程入学と同時に、酒詰先生の御自宅（京都市上京区紫竹高縄町の借家）の2階で、酒詰先生の御長男治男君と同家に棲むことになった。1階の小部屋には北海道函館市から同志社大学に進学していた千代肇氏が下宿していたが、実は前年まで鈴木重治氏が下宿していた家で、家主が居住しなくなったので酒詰先生が借り受けたものであった。このため治男君と同宿した2階には、鈴木重治氏の私物が残っていた。

4月初旬に酒詰先生宅に引越し荷物をあずけ、同月10日から四天王寺本坊に調査団の方々と合宿して中門跡を担当する東京大学建築史学研究室のチームに参加して発掘調査をした。この発掘調査で関西方面の考古学者と多く面識を得ることができた。

5月16日に発掘調査が終了して同志社大学に戻って見ると、すでに大学院の授業は始まっており、入学式なしに大学院に入ることになった。

『実習室だより』について

『実習室だより』第1号は4月から宮崎県立博物館に学芸員として赴任した鈴木重治氏がまとめておいてくれた原稿によって、4月5日発行の第1号として出版し、以下毎月初旬前後に刊行するようにつとめたが、夏になると同志社大学としての発掘調査や、奈良国立文化財研究所からの発掘調査参加依頼などのため、発行日を固定できなくなった。大学院生が『実習室だより』の編集・発行の時間がとれなくなると、酒詰先生ご自身が原稿を執筆されることが多くなった。実習室の事務を担当する者を欠いた体制に困難があった。

同志社大学の考古学研究室と考古学研究会

1957年度生 白石太一郎

よく知られているように、同志社大学に考古学の研究組織が成立したのは、昭和28（1953）年4月に東京大学の人類学教室から酒詰仲男先生が着任されて以降のことである。先生は考古学というよりは、東大の人類学教室のPrehistory、すなわち「先史学」の学統を受け継がれていたことから、この時から同志社に先史学会・先史学実習室が出現するのである。

この時先生は、東大時代に関東地方を中心とする各地の貝塚の踏査で採集された膨大な土器・石器などの文化遺物や貝類や獣骨などの自然遺物を同志社に持ってこられたが、それらの資料は今出川キャンパスのグラウンドの北よりにあった同工館一階の二部屋ほどに設けられた先史学実習室に持込まれた。先生は文化学科の先生方の研究室のあった寧静館にも研究室を持っておられたが、研究にはもっぱら資料のある同工館の実習室を利用され、ご自分の蔵書などもこちらに置かれていた。このため同工館のこの部屋が、同志社の考古学（先史学）の研究室・実習室となるのである。専攻生をはじめとする学生も、もっぱらここを勉強場所、あるいは溜り場として利用していた。

白石が文学部に入学した昭和32（1957）年前後から、日本はようやく戦後の混乱期を脱し、大規模

な開発事業にともなう事前発掘調査が各地で行われるようになる。同志社の考古学専攻の大学院生や学部生なども、こうした事前発掘調査に駆り出され、また大学自体も名神高速道路の建設に伴う発掘調査を一部の地区で引受けることとなる。発掘調査の作業員不足が深刻になり、名神速道路の建設に伴う京都市山科地区での調査では、京都府教委の働き掛けもあって、自衛隊の隊員さん達と共に発掘をしたのも懐かしい思い出である。

こうした発掘調査員不足の深刻化の中で、私が3回生になった昭和34（1959）年の4月、同期生と共に考古学を専攻することを決めていた故石附喜三男君（後に新設された札幌大学の教授となる）と話し合い、酒詰先生に相談することにしたのが「考古学研究会」とでも呼ぶべき考古学専攻生に限らない各学部生からなる考古学同好会づくりであった。目的はあくまでも発掘調査員の確保であったが、法・経・商・工学部などの学生諸君はそれぞれの熱き思いがあって学部を選んでいるのであるが、そうした中で学部の2～3年間考古学研究会に入って、専門分野の勉学とともに、教養・趣味として考古学に親しむのもまた意味があるのではないかという考えによるものであった。

「どれだけ集まるかわからないが、それは面白いね」というのが酒詰先生の反応であった。それで早速「地中の中の遺跡や遺物が諸君の鍬入れを待っています」などの勧誘文を入れたチラシを作り、明德館前などで配るとともに、要所々々に置いた。その結果、約30人もの入部希望者が現れ、さらに翌年には、同志社女子大にまで勧誘の手を伸ばす熱心な部員も現れ、1960年度には約10名の女子大生も入部した。

こうして新しく出来上がった「考古学研究会」に参加した諸君は、みな昼休みなどには同工館の先史学（考古学）実習室に殺到した。酒詰先生の勉強場所であった実習室の雰囲気は大きく変貌し、最初は賛成しておられた先生も「これはまずいよ。出て行ってもらって欲しくないか」ということになってしまった。考古学研究会がその部屋を確保することは、その初期のリーダーたちが当初から考えていたことであったので、やがてこの問題は解決した。なお、この今出川同工館の実習室が新町学舎に移ったのは、1962年10月のことである。

こうして同志社大学には、先史学会とその拠点である先史学実習室、さらに考古学研究会という二つの考古学の組織が並立することになった。私個人は、このことは同志社の考古学の進展にとって大変良かったと思っている。同志社大学が1958～61年に実施し、大きな成果を上げた福井県大飯町を中心とする若狭地方の考古学的調査は、まさに研究室と研究会が共同で実施したものにはほかならない。同志社大学の考古学調査報告書の第1冊である『若狭大飯』の序文に、当時の文学部長であった遠藤汪吉先生が明記しておられるように、この調査は地元大飯町の援助もあったが、調査経費の半ばは参加した考古学研究会の会員たちの自己負担によるものであった。まさにこの時の若狭の調査は、研究室と研究会の共同事業にほかならなかったのである。

以上が、私が知る考古学研究会成立の経緯である。今後も同志社の研究室と研究会が同志社考古学という車の両輪として提携し、日本の考古学の世界の中で一定の役割を果たしていくことを願ってやまない。

追 想

1959年度生 伊藤久嗣

現在の今出川キャンパス博遠館の場所に、かつて2階建ての同工館があり、1階東よりの二教室が考古学実習室だった。西室の壁面は木製とスチールの書棚が対面し、先史学研究会のたまり場。東室は、白い紙箱に土器が詰まった木箱がうず高く段積みされた倉庫兼整理室。北側の廊下に沿って水栓が並ぶ土器洗浄場。廊下にも木箱が密着して積まれ、未洗土器は布袋でリング箱に積まれ、通行も互いに身をひねる不自由さだった。確か心理学教室が廊下の東奥にあったかと思う。

入学式の翌日に研究会への一番乗りを目指したが二番目で、文学部以外の新入生も多くすぐに親しくなった。早々に六勝寺跡と長岡京跡の発掘に出かけ先輩の手ほどきを受けた。

水曜日夜の考古学談話会は顧問の酒詰仲男先生、大学院生などに混じって新入生も参加できたが、研究の動向や発掘ニュースなど議論百出で、深更に及ぶと先輩の下宿によく転がり込んだ。相撲大好き先輩に何度も畳に転がされたのが、通称「二条陣屋」だった。

高校時代の飛鳥巡りで川原寺跡の調査を見て考古学に興味を持ち、実習室と発掘現場がその後の私の人生を決定した。中でも酒詰先生の教えの数々、「考古学者に悪人はいない」との言葉が誤りだと何回か実感したが、先生の「自由・平等・博愛」の精神は揺るがない。

入学して角帽で制服をまだ着ていた頃、今出川通りで先生の「帽子と上着を脱げ」の一言でタクシーに乗せられた。東寺でストリップをご一緒した日を忘れもしないが、同類の士がいることを最近知った。

2年生の春は日米安保条約改定阻止の全学スト。6月に「考古学研究会」と改称された頃は総勢70名で、新入生歓迎見学会とコンパは大盛況だった。

東海道新幹線、名神高速道路、大型住宅団地の建設に伴う緊急発掘が増えると、他大学との交流が日常化した。完敗した翌年の西山古墳群保存運動も苦い思い出であるが、学生の交流深化を実現できなかった。今回復刊された『実習室だより』第5号に「青年考古学協会」の宛先が実習室だと知ったが、結局文化財保護の大きな潮流にならなかつたらしい。

昨秋、60年ぶりに紫野大徳寺の高桐院を訪れ紅葉を満喫した。酒詰先生の最晩年のお住まいは分からなかったが、懐かしさに目元が潤み、帰りに今宮神社であぶり餅を買った。

逝きし師の 教えの庭の片叢に 偲びつつ見む 大山蓮華 (通夜式にて)



【写真1】



【写真2】



【写真3】

【写真1】 実習室① 考古学研究室での輪読会。1960年か？中央：石附（白シャツ）、右側：伊藤・正岡、左側：三木（秋山）・高木、後ろ姿：田代。高木は経済学部1960年入会。正岡は法学部1959年入会。

【写真2】 実習室② 左から白石、細見、伊藤。卓上の土師器は福井県浜禰遺跡出土。

【写真3】 EVE祭先史学研究会主催「裏日本の古代遺跡」展。1959年11月26～29日。寧静館1階会場にて。展示会最終日夜の記念写真。岡田茂弘氏撮影。前列左から岡田・正岡・酒詰・米原、中列左から田代・伊藤・石附・白石・夏目・中村・八木、後列左から宮森・木下・津田・橋本。

【写真4】 浜詰遺跡の復元住居。1959年5月2・3日。前年の発掘調査後に復元された住居を見学。石附先輩と破風に登ると、砂浜の約500m先に日本海を遠望。当時は目の前からずっと砂浜続きで浜小屋が点在。函石浜遺跡まで歩き、丹後木津の冷泉で一泊。翌日は天橋立経由で帰京。



【写真4】

今ある私の原点—考古学と出逢った場所—

1959年度生 細見 克

歴史学や考古学とは全く縁のない学部（商学部）に在籍し、たまたま高校時代から共に過ごした故正岡久直氏に誘われ、主体性ないまま当時の「先史学研究会」に入りました。

私たち1959年度の新入生が17名入会し、そのうち、日本史専攻でない学生が10名を占めるようになりました。その以前の新入会員は表の通り、日本史専攻生が数名程度でした。この年度に初めて一般学生が入会できたのは先史学研究会の諸先輩の考えだと思います。

その真意は風化して断言はできませんが、当時、終戦後15年経過し、我が国が大きく発展途上にあった時代のように思えます。昭和39年に東京オリンピック開催を控え、新幹線や高速道路等の建設による国土の開発に伴い、古墳等の歴史遺産の破壊が盛んにおこなわれるようになりました。そのためには発掘調査員が数多く必要になり、一般の学生の入会を認めたのではないかなと思います。そして、1960年度に会名を少しでも親しみやすい「考古学研究会」と変更した記憶があります。会の名前を変えたことの結果かも知れませんが、1961年には22名の新会員がありました。同時に、この年から同志社女子大生にも門戸を広げています（表参照）。会員増加を図り、趣味としてのサークル意識が強くなってきた様にも思います。何しろ、60年前のことですから、はっきり覚えていないことと、自分ではそう思い込んでいることもあるかも知れません。

【年度別入会者数】

入学年度	専攻生	一般入会者	合計	備 考
1957年度	4名	0名	4名	会名「先史学研究会」
1958年度	1名	0名	1名	
1959年度	7名	10名	17名	
1960年度	2名	12名	14名	改名「考古学研究会」
1961年度	5名	17名	22名	同志社女子大生入会
1962年度	4名	2名	6名	
1963年度	13名	6名	19名	

歴史や考古学に全く無知であった私は酒詰教授をはじめ、多くの先輩たちに支えられてきました。現在でも先輩や後輩たちからの力添えによって日々古市古墳群地域のガイドをし、この歴史景観の素晴らしさを感じていただき、1500年間先人たちの残してくれた歴史遺産を200年、500年先にも存在している社会を維持できるよう活動しています。こんな生きがいを感じる晩年を過ごせることは本当に当研究会でご縁をいただいた諸氏のお陰で、改めて深く感謝致す次第です。このように人に恵まれているのはやはり基点は酒詰先生の人間性にあります。1960年春、和歌山県串本町の笠嶋遺跡の調査に連れていただいたのですが、太平洋を望みながら「歴史を学んでいる人間には悪人はいないと思って人と接しなさい。」と言われた言葉が60年経っても私の脳裏に残っています。最近はその酒詰先生の言葉は「人は歴史を学ぶことによって善人になる。」ということをおられたのではないかと思います。

『実習室だより』を繋ぐ

1962年度生 堀江門也

『実習室だより』の存在は全く知りませんでした。しかし、1962年9月20日発行13号に、私も出席した還暦祝賀会のことや、何故か追加された11月号に、実習室があった同工館の廊下が若狭の製塩土器が詰められた箱で身動きが出来なかった上に、考古学研究会員70～80名でゴった返していたことの記述に懐かしさを覚えると共に、ピピッと繋がりを覚えることが出来ました。酒詰先生最後の実習生として1966年度まで繋いで行かねばと思い、箇条書きではありますが、主な出来事や発掘調査・研究等の年度を追ってまとめてみました。

昭和37（1962）年度

- 6月 新入生（合同女大生）歓迎バスツアー（琵琶湖一周）
平城宮跡（近鉄車庫建設）保存運動
- 7月 福井県鳥浜貝塚発掘調査（立教大合同）
丹後網野・木津遺跡分布実測調査
- 8月 長崎県五島離島文化第1次調査（福江市大浜・岐宿遺跡）
- 9月 酒詰仲男先生還暦記念祝賀会
- 10月 丹後大泊古墳群発掘調査

昭和38（1963）年度

- 5月 考古学研究会が学生会館別館BOXに移転
丹後平遺跡試掘調査（堅田直先生）
- 7月 大阪府弁天山古墳群発掘調査（関西の大学合同調査団）
長崎県五島離島文化第2次調査（有川遺跡）
- 8月 長崎県五島離島文化第2次調査（三井楽貝塚遺跡）
宮崎県尾立縄文遺跡発掘調査
大分県大恩寺洞窟遺跡発掘調査
- 10月 大分県丹生遺跡第2次発掘調査（財団法人古代学協会合同調査）
- 2月 大阪府泉北ニュータウン予定地内（陶邑）分布調査（関西の大学合同調査）

昭和39（1964）年度

- 4月 酒詰仲男先生内地留学（年間休講）、考古学実習は堅田直先生
- 7月 大阪府將軍山古墳保存運動
丹波竹野川流域分布調査、神明山古墳墳丘測量
- 8月 長崎県五島離島文化第3次調査（福江地区）
千葉県加曾利南貝塚確認調査（日本考古学協会）
- 9月 岡山県黄島貝塚発掘調査
- 10月 東京オリンピック

2月 大阪府泉北ニュータウン予定地内（陶邑）分布調査（関西の大学合同調査）

卒業論文試問会

梶敏夫：蕨手文について（京都市在住）

五島敬二：縄文時代のことについて（東大阪市在住）

花谷：小江慶雄教授に付いて卒論を書く

昭和40（1965）年度

4月 大阪府百済寺跡（特別史跡）整備に伴う発掘調査

5月 酒詰仲男先生ご逝去

6月 酒詰仲男先生告別式

7月 丹後熊野地域分布調査、網野銚子山古墳墳丘測量

丹後平遺跡発掘調査（堅田直先生）

9月 森浩一先生着任

2月 卒業論文試問会

垣次 勉：製塩について-師楽式土器を中心に-（赤穂市在住）

堀江門也：縄文時代集落論（京田辺市在住）

以上、とにかく次に繋げたかと思えます。

『実習室だより』が刊行された時代は、簡便な印刷機として「ガリ版刷」が流行していた時で、酒詰先生自ら鉄筆を握っておられたのでしょうか、コピー機も普及していなくて、実習室にある専門雑誌類や報告書を手に取って、コピー機があればと思いながら卒論にも使った大湯環状列石の報告書を手書きで写したことを思い出します。

『実習室だより』を拝読するにつけ、改めて酒詰先生の調査研究、文化財保存、博物館等についての熱い思いがヒシヒシと伝わってきます。そんな酒詰先生の熱い講義を直接受けられなかったことが、今も悔やんでも悔やみきれません。もしかしたら人生が変わってしまったかも、その場合どんな人生だったとうかと色々フラッシュバックを繰り返している今日この頃です。

おまけを三つ。その一つは、先生の奥様から思い出にといただいた色紙に「夜の市電 乙女ら涼しき 腕をならべ」とありました。酒詰先生の一面をよく窺うことが出来ます。

二つめは、土岐仲男のペンネームでの著述が見られる様に、今年の大河ドラマ「麒麟がくる」で話題の土岐氏の一族を自認されていたことを、酒詰先生の奥様から伺ったことがあります。

三つめは、酒詰先生に会いたくなったら三条大橋東南詰にある高山彦九郎像を見上げて下さい。そっくりと思うのは、私だけではないと思います。



酒詰仲男先生に似ている？三条大橋東南詰・京阪三条駅の高山彦九郎像（水ノ江撮影2021.2.21）

